

日本学術会議主催 学術フォーラム「減災の科学を豊かに―多様性・ジェンダーの視点から―」

ご紹介頂きました日本学術会議会長の西隆です。私どもが主催する学術フォーラム「減災の科学を豊かに―多様性・ジェンダーの視点から」を開催したところ、休日にもかかわらず、ご参加頂き、ありがとうございます。

東日本大震災は、地震、津波、原発事故による甚大な被害をもたらし、被災地は、今なお復興途上にあります。福島原発事故については、事故を起こした原発を人間のコントロール下に置くに至っておらず、また飛散した放射性物質の影響を除去するに至っていません。その意味では、まだ災害が継続しているといわなければなりません。

この震災は、日本人に大きなショックを与えました。その結果、復興に当たって、社会のあり方、すなわちコミュニティの形成から、社会が使用するエネルギーの供給のあり方に至るまでを、根本的に見直そうという議論が起こっています。それは同時に、より厳しい形で現実のものとなってきた人口減少社会に対応するという視点も含んだものでなければなりません。そう考えると、今日重要な議論は、東日本大震災を機に、第2次大戦後の経済成長型社会との中で形成された価値観や主流となってきた科学技術を、二つの視点、すなわち、人間も自然の一部であるという認識を通じた自然との対話という視点と、経済社会の発展という表層の下で進んできた少子化が突きつける日本社会と人間の不適合問題という視点から、改めて問い直すことでもあります。

その重要な切り口の一つが、紛れもなく、本日のフォーラムの主題である、多様性やジェンダー問題です。特に、日本社会においては、先進工業国の中でも、ことに男性中心に経済、政治、あるいは学術活動が構成されてきたのは否定できません。もちろん社会一般を眺めれば、既に地殻変動が起こっており、男性中心の社会とは言えない状況が生まれている領域もありますが、まだ多くは、男性中心といわざるを得ないというのが、公平な見方ではないかと思えます。先に述べた、価値観や科学技術のあり方の転換の中で、多様性の尊重やジェンダー間の平等を定着させることができるのかは、今後の日本社会にとって重要な課題となっています。

本日のフォーラムは、多様性やジェンダーの問題を、減災科学という観点から考察しようという趣旨です。実は、東日本大震災に係わる災害とジェンダーについては、既に日本学術会議のテーマとして定着しています、2011年6月には、やはり学術フォーラムとして「災害・復興と男女共同参画」6・11シンポを開催しました。また、昨年2月には、公開シンポジウムとして「災害復興とジェンダー」を開催しました。これらの中では、避難生活におけるジェンダー問題の軽視、復興計画作成における女性不在、復興予算におけるジェンダー的視点の不十分さ、被災地における女性の不安定な雇用等の具体的な問題を通して、災害と多様性やジェンダーの問題が論じられてきました。

今回の学術フォーラムは、減災の科学という概念を用いて、災害におけるジェンダー問題を、普遍的な、そして次の災害対策や他の地域へと応用可能な減災科学に内在化させる試みであるという企画の意図です。災害では、高齢者の人的被害が多くなり、したがって、女性の被害が多くなる傾向があります。減災の目標の一つは人的被害をゼロにすることにあり、そのためには、家屋倒壊や水害・津浪による被害から如何に高齢者、女性を守るのかという問題に真剣に取り組まなければなりません。もちろん、既に指摘されてきた避難や復興における女性、高齢者、障がい者、外国人に寄り添った対応が必

要という視点も重要です。

そうしてこうした分野で成果を上げるには、何よりも、女性の減災科学研究者が育って、常に女性の観点からも研究が行われるようになることが不可欠です。その中から、本日の基調講演をしていただくエレーン・エナーソン教授のような優れた研究者が日本でも多数生まれてくることが望まれます。

日本学術会議では、減災科学に限定されるわけではありませんが、様々な研究分野において、女性の科学者が活躍することが重要と考えています。このため、日本学術会議自身も、女性の会員数に数値目標を設定しています。会員の定員は210人と法律で決まっていますが、今年10月の会員の改選時には、22%、47人以上の女性会員とすることが目標で、2030年には会員の30%、63人以上を目標としています。今回の改選では、目標を達成できる見込みです。しかし、2030年の目標達成には、より広い裾野が必要です。若手・中堅の多い連携会員についても今回の改選で14%の女性比率を目標としています。そして、こちらは大幅に目標を上回る22%程度にすることができる見込みです。こうした裾野の上に、減災科学の分野でも多数の女性研究者が輩出して、幅広く、多くの人々に役に立つ研究が行われることを期待します。

結びに、本日のフォーラムで、災害とジェンダーあるいは多様性の文脈でより深い議論が行われることを願って、挨拶といたします。

2014年7月20日
日本学術会議会長 大西隆